

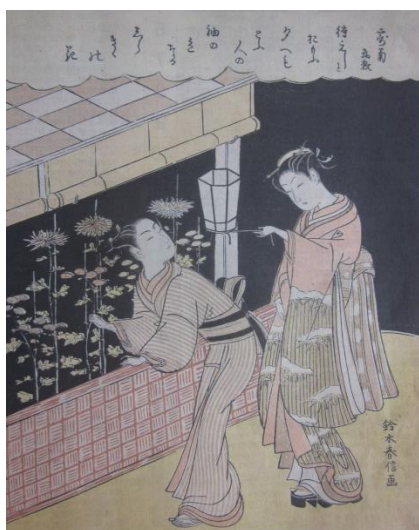
ボストン美術館浮世絵名品展 「鈴木春信」

千葉市美術館 17. 09. 06～10. 23 名古屋ボストン美術館 17. 11. 03～18. 01. 21
あべのハルカス美術館（大阪）18. 04. 24～06. 24 福岡市博物館（予定）

「鈴木春信」（1725?～70）は、江戸時代中期に活躍した「浮世絵師」で、高度な多色摺木版画すなわち「錦絵」誕生の頃に、細見で可憐で繊細な表情の美人画で人気を博して、今日の「木版多色刷りの錦絵」誕生に決定的な役割を果たし、後の「浮世絵」の発展に多大な影響を及ぼした第一人者として著名である。

画伯の作品は、若い恋人たちや母と子、さりげない日常の生活の景、古典主義から発想された「見立て絵・やつし絵」などを、小さな画面の中に詩的で洗練されたイメージでゆたかに表現している。そして、上質な紙に色彩を重ねた木版の暖かな風合いで、江戸の評判娘や名所を主題に取り入れ、「錦絵」の大衆化に貢献して、鑑賞者にとっては安らぎと至福を与えてくれるものであった。

本展は、質・量とも世界第一級の浮世絵コレクションを誇る「ボストン美術館」の所蔵品より、「春信」の作品とともに、この時代の気風を伝える「他の絵師」の作品を加えて希少な作品「約 150 点」が公開され展示されている。



《寄菊（きくによず） 夜菊を祈り取る男女》 1769～70年頃 中判錦絵 左
若い男女の初々しい姿を描いた「錦絵」は、夜の闇の中で菊の花を手折ろうとしている少年が、明かりを差し出した振袖姿の娘の方を振り返る様子で、背景の漆黒の闇が引き立てており“胸高く鳴る視線のドラマ”の光景である。

《風流江戸八景 上野の晩鐘》 1768年頃 中判錦絵 右
上野の寛永寺の山門で、参詣から帰る武家の若者一行が入相の鐘に聞き入っている様子で、巧みな造形感覚と鮮麗な色彩がめざましくて、繁栄する江戸に誇りを感じていた当時の人々の心情に訴える作品とされている。